

これを思い、これを思う

八十島義之助*

Thought upon Thought

Yoshinosuke YASOSHIMA*

統計の示すところによると、大都市在勤者の通勤時間は伸びる一方で、60分なら文句も言えなくなったそうだ。その長い時間をすごす電車の中で、通勤客は何にをしているのだろうか。ある朝その気で車内を見回した。眼についた一番はスポーツ新聞の耽読だった。そしてほかは、文庫本、週刊誌に目をとす、友人とだべる、居眠りするなどなど様々で、考え事をしている人も少なくなく、それぞれに習慣化したすごし方をしていた。この人たちは毎日車内で同じことをしているとすると、5年もたてば累積時間は大した長さになっているだろう、と余計な詮策もするのだった。

ところで、わたしはひと昔前のことを思いおこした。「これを思い、これを思い得ざれば、鬼神これを授く」という管仲の言葉である。三分の一世紀も前になるが、結婚祝いとして、造船技師だった叔父が書いてくれたものである。管仲の名がどうしてあの叔父から出てきたのかは、聞き漏らしたが、意味だけは教えてくれた。

何か工夫、決心の類をするために頭をひねっても良い考えが浮かばない。しかし、なおかつ倦まずに考えて繰り返し、結論にはとうとう巡り会えずじまいで、諦めようとした時になってはじめて、よい工夫や決心が湧いてくるものなのだ。従って、考えごとをする際でも、辛抱強く粘らなくてはいけないという意味だそうで、特にわたしには、それにおまけの言葉が付いていた。良い発明や発見は、天才的な一瞬の閃めきによって生れるようにみえる。しかし、それは内情を知らぬ者の見方であり、実際は、苦心惨怛し、ああでもない、こうでもないと考えぬいた場句の産物なのである。従って、お前も何でも簡単に出来ると思ってはいけない、という小言で結ばれるのだった。

折りにふれて、この言葉を思い出してきたのだが、最近になって、わたし自身について気になる事が一つある。それは、良い工夫が浮かばなくて困っているくせに、まじめに粘り強く考える時間を、どれだけ生み出しているかという点である。やれ打合わせだ、会議だ、報告書きた、そしてルーティンの書類整理だとか、次々に仕事をし、一見忙しくやる事をやっているようには見えるのだが、じっくり考え込む時間というもの、次第に減ってきているのではないか。つまり、それだけ良い考えも生まれなし、工夫も浮かんでこない事になる。

以上は、わたし自身ふりかえってそう気がついたのだが、ことによるとわたしだけではいかもしれない。世の中が忙しくなる一方、街に出ればあらゆる種類の新聞、雑誌、家へ帰ればさらにテレビが待ち受けている。これらは、深く考え込む時間を人間からうばう最も簡単な道具である。

そんな事を考えながら通勤電車の光景を思いなおしてみた。混んでいたら立つだけで精一杯だし、座ったとしても、やっている事はそれぞれ理由のあることだから、ここで良いの悪いのというつもりはない。しかし、片や週刊誌、スポーツ新聞に時間をつぶし、片や専ら思索にふけているとしたら1か月、1年間にはその2人の人の中には、何らかの大きな差がついてくるのではなからうか。長時間通勤を強いる地域社会など決して良い事ではないが、一方、やむを得ず今日、長時間通勤をする場合、その際の時間の使い方は、大きくいえば、その人の一生を左右するに足りるほど影響があるのかも知れないと思に至ったのである。

*国際交通安全学会副会長、埼玉大学工学部長
Vice President, IATSS, Dean, Faculty of Engineering, Saitama University
原稿受理 昭和57年7月1日